

漢文

訓読の基本 ①

理解を深めるために

■学習のねらい■

漢文は、楽しく、味わいのある話が多いのですが、昔の中国語で書かれていますので、「訓読法」（漢文のきまり）を知らなければ、読むこともできません。そこで、はじめに、読み方のルールである「訓読の基本」を二回に分けて学びます。今回は、その一回目です。「訓読」とは何かを知り、「訓読」するために必要な「訓点」のきまりについて学びましょう。「訓点」には、「句読点」・「送り仮名」・「返り点」の三つがあります。

*

*

*

「訓読」とは何か

「訓読」とは、簡単にいうと、「読書」という中国語を「書を読む」という日本語に直して読む方法のことです。

読書 ↓ 書を読む

漢字・漢文が、お隣の国、中国から、朝鮮半島を経由して伝えられ、中国語の発音をもとにした読み方である「音読み」と、日本の意味を当てて読む読み方である「訓読み」が、誕生しました。

- 音読み……中国語の発音をもとにした読み方
- 訓読み……日本語の意味を当てて読む読み方

そして、日本の祖先は、元々は中国語である漢文を、この「音読み」と「訓読み」とを上手に使い、さらに日本語の語順に合わせながら、日本語に訳してよむ読み方を工夫しました。つまり、使われている漢字をそのままいかしながら、日本語に訳して読んでしまおうという読み方です。これを「訓読」といいます。

漢文の構造と「訓点」のきまりについて

■訓点について

漢文は、昔の中国語ですから、そのままの形で、日本語として読んでいくためには、多くの約束事が必要です。その約束事に用いる記号を、まとめて「訓点」



講師

渡辺 恭子

と呼びます。「訓点」には、「句読点」・「返り点」・「送りがな」の三つがあります。

①「句読点」(「、」)。
漢文は、もともと同じ大きさの漢字が、同じ間隔で並んでいるだけで、文や語の切れ目ありません。それを「訓読」の際、読みやすくするようにと付けたものです。

②「送り仮名」
「訓読」するときに、中国語である漢文にない文字(活用語尾・助詞・助動詞)は補わなければなりません。これを「送り仮名」といい、漢字の向かって右下に小さく「カタカナ」(歴史的仮名遣い)で付けるきまりになっています。

③「返り点」
中国語と日本語では、語順(構造)が違います。このように、日本語とは構造の異なる漢文を「訓読」するときには、読む順序を示す記号が必要です。この記号を「返り点」といいます。

■漢文の構造

漢文	日本語
主語 + 述語	主語 + 述語
修飾語 + 被修飾語	修飾語 + 被修飾語
述語 + 目的語(補語)	目的語(補語) + 述語

【返り点の種類】

「返り点」は、「下から上へ返って読む」場合にだけ付ける記号です。「返り点」には、「レ点」「一・二点」「上中下点」など何種類かの記号があります。それぞれ、どんな場合に使う記号なのかを、例文をもとに考えていきましょう。

「立^ッ志[」]」は、「志を立つ。」と読みます。つまり、下の漢字「志」(目的語)を読んでから、上の漢字「立つ」(述語)にひっくり返っています。このとき、カタカナの「レ」のような記号を使います。この記号を「レ点」といいます。「登^ル竜門[」]」は、「竜門に登る。」と読みます。ここでは、「竜門」(補語)から「登る」(述語)へ、二字返って読みますから、「レ点」ではなく「一・二点」を使うのです。

- レ点…下の一字から、上の一字に返って読むことを示す記号。
 - 一、二点………二字またはそれ以上へだてて返って読むことを示す記号。長文なら一・二・三・四・五……と使える。
 - 上(中)下点……一・二点のついた句の中にはさんで、さらに返って読む記号。
- ※「返り点」は、言葉と言葉の関係や、文の構造を示す記号にもなっています。

「書き下し文」について

「書き下し文」とは、漢文を訓点にしたがって漢字仮名まじり文に改めた文のことです。漢字はそのまま漢字で、「カタカナ」で書かれた「送り仮名」は平仮名にかえて、日本語の語順に直します。

注意点は、以下の二点です。

- ① 一部の漢字（日本語の助詞・助動詞にあたる漢字）は平仮名にする。
 - ② 送り仮名は、平仮名（歴史的仮名遣い）にする。
- ※また、漢字だけの漢文を「白文」といいます。

